

# ガザ・モノローグ

萩原雄太 (JP)、劇団カモメマシン (JP)



プロジェクト

COVID-19パンデミック中に劇場が利用できなくなったことから、萩原雄太と彼の劇団カモメマシンは、電話そのものが「劇場」として機能するテレフォンシアター・シリーズを創作・上演してきた。受話器を通じて、電話線に沿って構築された演劇空間の中で、サミュエル・ベケットの『不在の私』やシモーヌ・ヴェイユの『重力と恩寵』に基づいた作品など、これまでのいくつかの作品が上演されている。このパンデミックに対応して開発された「声だけの劇場」は、日本の演劇シーンにおいて新しい演劇実践の形として大きな注目を集めた。2024年にプレミアされたガザ・モノローグは、電話劇場の手法を応用して創作された参加型パフォーマンスである。観客が電話ボックスに入ると、ダイヤル式電話と封筒に入った手紙に出会う。封筒の中には、パレスチナ人によって書かれた、パレスチナ劇団アシュタル劇団によってガザ・モノローグの一部として発表されたテキストが1つ入っている。指定された番号をダイヤルすることで、参加者は手紙を声に出して読み、その声を記録するよう指示される。記録に加えて、参加者は同じ電話を通じて他の人によって記録されたテキストを聞くこともできる。このようにして、テキストを読み聞きすることで、また内容だけでなく声も交換することで、参加者は遠く離れた場所で起こっている悲劇を共有することになる。この声の循環を通じて、参加者はまた自らの公共圏を描写し、想像することができるようになるのである。

プロジェクトのタイプ: パフォー パフォーマンス  
マンス

プロジェクト創作年: 2024

プロジェクトのURL :

<https://www.youtube.com/watch?v=zzv9dP6qC1Uhttps://docs.google.com/document/d/1WdbK1Qo8bCEOEdHMnpyw5SN2UL6Vh3yoyNuBvkkvrXQ/edit?tab=t.0>

クレジット: 創作メンバー: 萩原雄太、清水穂波美、伊藤真 電話装置: 立原敦大 制作: 劇団カモメマシン

受けたサポート: セゾン文化財団

キーワード: キーワード: 参加型パフォーマンス、劇場、電話

AIの使用: はい  
いい

AIの使用: 説明オープンエアのテキ オープンエアのテキスト音声変換 (TTS) を指示音声に使用  
スト音声変換 (TTS) を指示音声に使用

ソフトウェア バイソンソ  
ア： フトウェア：

ハードウェア ダイアル式電話、ラズベリーパイハードウェア：

ア：  
他の賞にプロジェクトを追加で応募したいですか？：いいえ、このプロジェクトを他の賞で追加検討してほしくありません。

アーティスト  
ト

---

萩原雄太

性別： 男性性別：

代名詞： he/him代名  
詞：

1983年10月1日生年月 1983年10月1日

日：  
経歴：萩原雄太は東京を拠点とする劇場監督であり、パフォーマンス集団カモメマシンの創設者である。彼は早稲田大学で学びながら演劇実践を開始した。2007年、個体の身体と公共圏の関係性を探求するパフォーマンス集団劇団カモメマシンを設立した。演出作品には、福島第一原発事故後に福島県で上演された『ゴドーを待ちながら』、日本国憲法をテキストとして用いたパフォーマンスである『オレガヨ』（2017）（ルーマニアのタンブ・ディマージュ・クルージュ・フェスティバルでも上演）、シアター・コモンズ・トウキョウ18の一部である『ハッピー・デイズ』、そしてCOVID-19パンデミック中に電話をパフォーマンスの媒体として用いて開発されたテレフォンシアター・シリーズが含まれる。2022年以降、彼は南京大虐殺を主題とするリサーチベースのパフォーマンスと制作過程の作品のシリーズである南京プロジェクトを開発している。第13回愛知芸術文化センター劇作家賞と戸田市市民ホール劇場コンペティションでの優秀演出賞を受賞した。2018年、ベルリンのテアタートレップフェン国際フォーラムに参加した。セゾンフェローI（2022-2023、2024-2025）を務めている。2024年、中国舞踊監督メンファン・ワンと独立キュレーター・ユアン・ザンとともに日中現代パフォーマンス交流プロジェクトを共同設立した。アジア文化評議会ニューヨークフェローシップとグローバル・パフォーマンス・アンド・ポリティクス・ラボラトリーのグローバルラボフェロー2024-26に選定された。

**Social media:** [https://www.instagram.com/yuta\\_hagiwara/](https://www.instagram.com/yuta_hagiwara/)

**Url:** <https://www.kamomemachine.com/>

---

アーティストグループ  
プ

---

劇団カモメマシン（日本）

歴史：2007年に設立された劇団カモメマシンは、西方輸入概念である「公共性」が個体の身体を通じてどのように具体化されるかを探求することを中心的なテーマとした作品を創作している。現在のメンバーは萩原雄太（芸術監督）、清水穂波美、伊藤真である。主要作品には、2011年の福島第一原発事故後に福島県の街路で上演された『ゴドーを待ちながら』があり、後にローマの演劇博物館と早稲田大学の坪内逍遙記念演劇博物館で展示された。もう1つの注目作品は日本国憲法に基づいたパフォーマンス『オレガヨ』であり、タンブ・ディマージュ・フェスティバル・クルージュ（ルーマニア、芸術監督：ミキ・ブラニステ）で上演された。同劇団はまたシアター・コモンズ・トウキョウ18でサミュエル・ベケットの『ハッピー・デイズ』を上演した（演出：相馬千秋）。COVID-19パンデミック以降、同グループは電話線をステージとして使用するテレフォンシアターを制作している。これには『ハロー、イツ・ノット・ミー』、『ハロー、シモーヌ』、『ハロー、イン・ザ・インターバルズ』など、俳優と観客の対一のパフォーマンスが含まれている。また彼らは、パレスチナ人による個人的証言を災害緊急情報伝達システムをモチーフとして読むという『ガザ・モノローグ』を上演した。これは天王洲アイルのミート・ユア・アート・フェスティバルでの現代美術展「SSS：スーパー・スペクトラム・スペシフィックेशन」の一部であった（監修：山崎純也）。2022年以来、同劇団は日本、台湾、イギリスで行われたリサーチ活動、ワークショップ、制作過程の作品を含む南京大虐殺に関するリサーチを進めている。

facebook facebook <https://www.facebook.com/kamomemachine>

<https://www.facebook.com/kamomemachine>

**Url:** <https://www.kamomemachine.com/>

---